



ことし被爆73年を迎えます。あの日を語り継ぐ取り組みは脈々と続いています。最近、新しいデジタル技術を取り入れて伝えようと、励む高校生たちが、広島県内にも広がっています。

広島女学院高(広島市中区)の生徒は証言動画や体験記、当時の写真などを立体的な地図の上に載せて紹介するウェブサイトに「ヒロシマ・アーカイブ」を作っています。被爆地を訪れなくても、世界中の人が学ぶことができます。

福山工業高(福山市)の生徒は爆心地の街並みをバーチャルリアリティー(VR)で再現しています。被爆前後を疑似体験し原爆の怖さを分かち合おうという試みです。

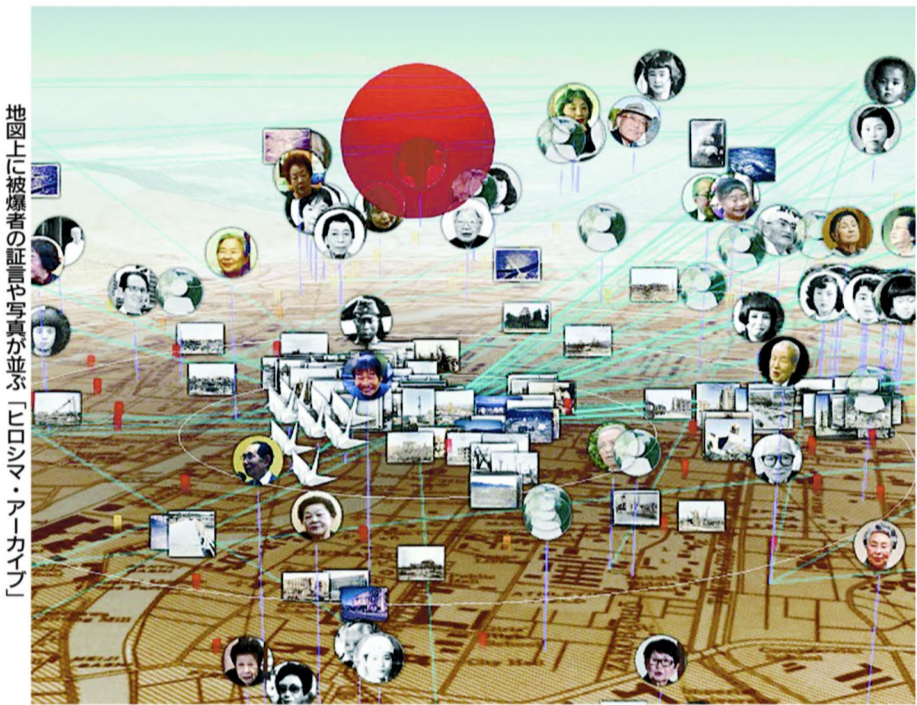
最新の方法ですが、被爆者の体験を聞いてから作り始めるというスタイルは変わりません。デジタル技術を通じ、生身の人間が体験した苦しさと悲しさをどう伝えるかが大切です。

「Peace Seeds」
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「Peace Seeds」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学、高校生の25人が自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

第52号 デジタルで伝える

広島女学院高

ウェブに証言動画マップ



地図上に被爆者の証言や写真が並ぶ「ヒロシマ・アーカイブ」

ヒロシマ・アーカイブは「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」に加わる広島女学院高の署名実行委員会が中心になって作っています。首都大学東京の渡邊英徳准教授と2011年から始め、手記と合わせて170人以上の体験を収めました。

パソコンやスマートフォンなどで公開し、見た人がメッセージを書いたり地名で検索できたりする機能を加えました。修学旅行生向けのワークブックも作り、事前学習や広島でのフィールドワーク、後の振り返りもできるよう工夫しています。(高2岩田央)



川島さん(左端)の証言を収録する広島女学院高の生徒(撮影・岩田央)

証言動画のうち約50人は生徒がビデオ撮影しました。昨年12月、午後8カ月に被爆した西区の川島智恵子さんの証言を取材しました。

1時間半におよぶインタビュー。「20歳まで生きられないうちが友人に支えられた。自分が被爆者だと知った義母に出て行けと言われた」と話す様子。

今はモノクロ写真のカラー化にも取り組んでいます。被爆者から家族写真などを借り、画像をスキャンし、カラー化は生徒もできます(高2岩田央)

切実な体験掘り下げる

被爆証言の編集では「間」を大切にします。言葉に詰まったり、涙を流したりする被爆者の姿を残すことで、見る方もつらさが分かります。声や表情も伝わるのは動画の長所。海外から届いたメッセージを読み平和への考えを広く知りたいです。(聞き手は高2岩田央)



広島女学院高アーカイブリーダー 杉野友菜さん(17)=2年

福山工業高

VRで街の質感まで再現



被爆直後の爆心地を再現したVR。中央は原爆ドーム(福山工業高提供)

広島市の爆心地を再現したVRは、福山工業高の計算技術研究部が2016年から作り始めました。原爆投下前後の1時間を5分に縮め、通りから見た約900㎡の光景を映しています。

文献や写真を調べ、被爆者にも聞き、建物の場所や大きさを正確に割り出します。質感や汚れが生活感を生むので、建物の壁のざらつき、自転車の赤さび、タイルや防火用水の光の反射

にもこだわっています。これまでコンピューターグラフィックス(CG)で被爆前の広島を再現しましたが怖さを五感へ訴えるには不十分。「技術の限界」ともどかしかったです。安くなったVRの装置を購入し、試作版は米国でも公開。今の作品は2年後の完成を目指し、「あの日」と今を結ぶ懸け橋にしたいと願っています。(高2沖野加奈)

「あの日」風化させない

ITが発達し、以前は大がかりなVR制作が難しく、今では高校生が手軽に体験できるようになりました。インターネットを使うことで、爆心地を再現したVRも、新しい方法が出てきました。

爆心地を再現したVRも、新しい方法が出てきました。爆心地を再現したVRも、新しい方法が出てきました。



福山工業高生徒にサポートされ、VRを体験するジュニアライター(撮影・溝上藍)

専用ゴーグルとイヤホンを着け、自分の目と耳で感じた5分は、一生忘れられません。

スタートは広島県産業奨励館前。曲線の美しい白い門を見上げ「元安川沿いを北へ進みます。猿楽町の駄菓子店の前で足を止めた。チョコレートやあめが並んでいます。当時の子どももドキドキしながら棚のぞき込んだでしょう。」

セミの声を聞きながら南側の細工町へ入ると島病院が左前方に見えます。「プルプル」。低い音に気が付き青空を仰ぐと、米粒ほどの飛行機を見つけた。突然、目の前が真っ白した。思わず「あ」と小さく叫びました。この音も、原爆が落とされた瞬間でした。

光の幕が消失、真つ暗闇になると、徐々に炎が浮かび、がれ

奪われた日常を疑似体験

きの山が現れました。鉄骨だけになった建物から火が噴き出していたのです。「バチバチ」。火のはせる音、こうつと吹く風の音に不安が増し、自然と体中に力が入ります。

今すぐゴーグルを外してしまいたい。そう感じ、はっとしました。(高2沖野加奈)



福山工業高 前計算技術研究部長 平田翼さん18=3年